

# 台湾侵攻4

## 第2梯団上陸

大石英司

*Eiji Oishi*

### 立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

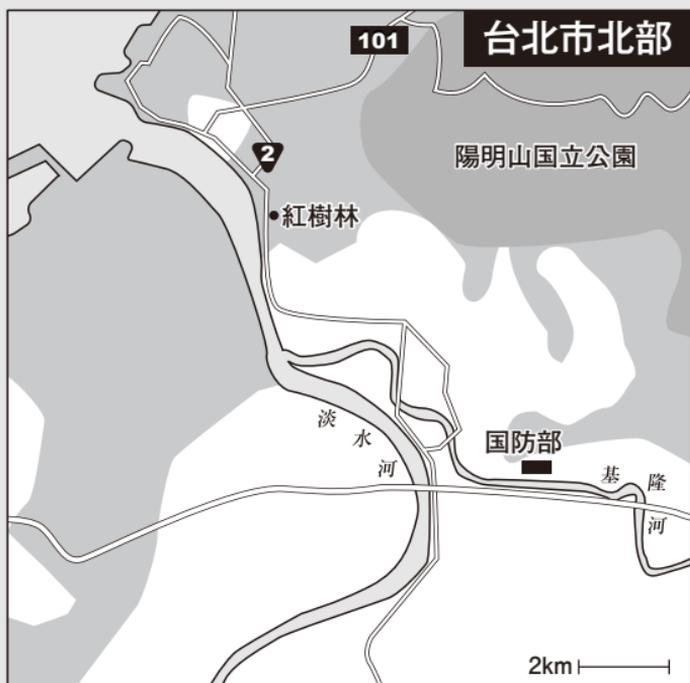
#### ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画  
地図 平面惑星  
安田忠幸

## 目次

プロローグ	15
第一章 濁水溪	22
第二章 二一世紀にようこそ！	40
第三章 空中機動旅団	67
第四章 暗い森にて	92
第五章 避難民	118
第六章 観戦武官	139
第七章 前線航空管制	162
第八章 サムライ	184
エピローグ	192



# 台湾周辺地図

## 濁水溪周辺



# 登場人物紹介

## ◆日本

### ●陸上自衛隊

《特殊部隊サイレント・コア》

土門康平 陸将補。水陸機動団長。

〈原田小隊〉

原田拓海 一尉。海自生徒隊卒、空自救難隊出身。

畑友之 曹長。小隊ナンバー2。コードネーム：ファーム。

高山健 一曹。分隊長。コードネーム：ヘルスケア。

大城雅彦 一曹。コードネーム：キャッスル。

待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

田口心太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

比嘉博実 三曹。田口のスポッターを自称。コードネーム：ヤンバル。

吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〈姜小隊〉

姜彩夏 三佐。元韓国人、韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。

漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：パレル。

福留弾 一曹。分隊長。コードネーム：チェスト。

井伊翔 一曹。部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

水野智雄 一曹。元オリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

西川新介 二曹。もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニー

ドル。

小田桐将 三曹。タガログ語使い。コードネーム：ベビーフェイス。

阿比留憲 三曹。対馬出身。コードネーム：ダック。

赤羽拓真 三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：

シェフ。

〔訓練小隊〕

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。

## 〈水陸機動団〉

し ば ひかる  
司馬光 一佐。水陸機動団教官。コードネーム：女神。  
はく ば ごう  
白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

## ●海上自衛隊

### 〈第一護衛隊群〉イージス護衛艦「まや、(10250 トン)〃

くにしましゆん じ  
國島俊治 海将補。第一護衛隊群司令。  
うめはらとくひろ  
梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

## ●航空自衛隊

### 〈総隊司令部〉

まるやまたくみ  
丸山琢己 空将。航空総隊司令官。  
はぶみねみつ  
羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。  
きたがわ えいこ  
喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。情報将校。横田出身で、父親はイラク  
で戦死したアメリカの空軍将校。

しんじょうあい  
新庄藍 一尉。父親は防府の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

### 〈前線航空管制チーム〉

いのくちでつべい  
猪口徹平 元一尉。民間軍事会社と雇用契約を結び復帰。コードネーム：  
ノーザンベア。  
わか せ なおき  
若瀬直樹 一曹。チーム最年少の四〇歳。

## ●防衛省

うしじまやすお  
牛嶋保夫 陸上幕僚長。陸将。

## ●外務省

かたくらぞういちろう  
片倉宗一郎 外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。

## ●内閣

あさうしろう  
阿相士郎 総理大臣。

## ●警察庁

ひいらぎなおと  
柊木尚人 警視長。関東管区警察局・サイバー局参与。

## ●警視庁

はいたにあきお  
灰谷昭雄 元警部。警視庁公安部退職後任用。

## ●国際連合

さいおん じてる み  
西園寺照實 U N H C R 国連難民高等弁務官事務所・上級顧問。

## ●桜会

あかみねてつぞう  
赤峰鉄蔵 グループ社長兼代表取締役社長。

はまだ さ お  
浜田左千夫 元陸自三佐。関東エリアBCP（事業継続計画）本部長。

た なかふとし  
田中太志 元陸自一曹。八王子センター営業班員。

## ●日越人材ブリッジ

ディン・レイ・スエン 代表取締役。京族。

## ●その他

いとうひみし  
井藤浩 元陸自一佐。工学博士。陸上自衛隊初のサイバー戦部隊を立ち上げた後、民間に転じた。政府のハイレベル・セキュリティ・クリアランスを持つ。

しもやまゆうすけ  
霜山悠輔 桜会のコンビニの助っ人。190センチ近い大男。

こまちみなみ  
小町南 女子大生。コンビニのアルバイト。宋勤とは語学交流サイトで知り合った。

## ///◆アメリカ///

### ●空軍

オリバー・R・エバンズ 中佐。第18戦闘航空団の作戦参謀兼EXのインストラクター。

エルシー・チャン 少佐。ハワイ州空軍パイロット・中国系。

## ///◆中国///

### ●陸軍

#### 《第2梯団》

マーシアン  
馬雄 陸軍中将。第2梯団軍団長。

ジュワンシムルー  
莊心染 大佐。作戦参謀。

ボンジュアンジー  
彭智淵 大佐。技術将校。

#### 《第7空中機動旅団》

ファンヤン  
方陽 少将。第7空中機動旅団を率いる。元は武装ヘリのパイロット。

フーバクリン  
傅柏霖 中佐。一個中隊を率いる。ヘリパイ上がり。

ドゥーヘンハオ  
杜震豪 少佐。連絡将校。飛行科。

ファンクオファイ  
黄国輝 少佐。作戦参謀。

〈下駄部隊〉

ディンジョンウエイ

丁仲維 大佐。大隊長。

〈対日破壊工作チーム〉

コンシユエリ

孔雪麗 陸軍中尉。情報部所属。中国の少数民族の一つである京族。

イエエンチェン

顔誠 軍曹（中士）。孔雪麗の部隊ナンバー2。

●海軍

〈総参謀部〉

レンスエアン

任思遠 海軍少将。総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特殊戦司令官。

ジャオロン

〈蛟竜突撃隊〉

ソンチン

宋勤 海軍中佐。元北京大学日本研究センター研究員。

〈第164海軍陸戦兵旅団〉

ヤオイエン

姚彦 海軍少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン

万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン

雷炎 大佐。旅団作戦参謀。天才軍略家の異名を持つ。

タイイーチャイ

戴一智 中佐。旅団情報参謀。

チェンシュアイ

程帥 中尉。専門の技術将校兼雷炎大佐副官。

〈別働隊大隊〉

ツァオホーピン

曹和平 海軍大佐。別働隊大隊指揮官。

●中国兵器工業集団（ノリンコ）

シェンイーシン

鄭義信 エンジニア。

◆台湾

●陸軍

〈第10軍団〉

ユーマンミン

余明敏 陸軍中將。第10軍団司令官。

リーヨウイー

李友宜 少将。参謀長。

ペンウエイ

彭威 中佐。情報参謀次長。

ライルオイン

頼若英 中佐。作戦参謀次長。

チャンチャン

〈第234機械化歩兵旅団〉＝別名〈長城部隊〉

ファンジュヤン

黄九雲 中尉。小隊長。

フーティエンヨウ

胡天佑 伍長。マークスマン。

〈第586機甲旅団〉＝別名〈鍾山部隊〉

バイジンホァ

白景華 一等兵。戦車兵。

《第153歩兵旅団》＝別名〈翔龍部隊〉

于聰明 中佐。一個大隊を率いる。

《陸軍第601航空旅団》＝別名〈龍城部隊〉

傅祥任 少将。旅団長。

平龍義 少佐。第1中隊長。

藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。コールサイン：マリリン。

黄益全 少尉。藍志玲大尉と前席射撃手として組む。

田子瑜 少尉。新米仕官。

李冠生 陸軍大佐。元烈嶼守備大隊指揮官

潘英明 陸軍中尉。流ちょうな日本語を話す。

## ●海兵隊

《第66旅団》別名〈先鋒部隊〉

葉少博 大佐。戦車大隊を指揮する。

顔國輝 中佐。作戦参謀。

《第99旅団》＝別名〈鐵軍部隊〉

陳智偉 海兵隊大佐。一個大隊を指揮する。

黄俊男 中佐。作戦参謀、大隊副隊長。フログマン部隊出身。

吳金福 少佐。情報参謀。

王一傑 少尉。台湾大学卒のエリート。予備役将校訓練課程出身。

劉金龍 曹長（上士）。コードネーム：ドラゴン。

楊志明 上等兵。コードネーム：アーティスト。

《パラシュート連隊第3歩兵大隊〉

高冠華 中佐。大隊を率いる。

《戦車小隊〉

邱建安 中尉。戦車小隊長。定年前のベテラン。

## ●空軍

李彦 空軍少将。第5戦術戦闘航空団を指揮する。

劉建宏 空軍中佐。第17飛行中隊を率いる。編隊長機。

## ●国防省

谷進強 国防大臣。前国家安全局長。異名は「氷の男」、<sup>アイスマン</sup>「岩の男」。

## ●その他

ワンチーハオ

**王志豪** 退役海軍中將。海兵隊の元司令官。

ワンウェンション

**王文雄** 台日親善協会と党の対外宣伝部次長。王志豪とは遠縁。京都大学法学部、大学院を出ている。

ライシャオチヤオ

**賴筱喬** 戦死したライロンユン賴龍雲陸軍中將の一人娘。台北の飲茶屋の店主。

カンインジュ

**郎英九** 四湖郷長。

リウミンジュ

**劉明珠** 陽明山国立公園のパーク・レンジャー。

フーユアン

**胡源** 自動車整備工場経営者。



台湾侵攻4 第2梯団上陸



## プロローグ

人民解放軍第2梯団軍団長の馬雄マーレンゼン陸軍中將は、最後に自分が全力疾走したのはいつのことだったろうと恨めしそうに思い返していた。こんなことになるなら、せめて毎朝五分でも一〇分でも、ジョギングの真似事でもしておくのだったと後悔した。

西側世界ではプレート・キャリア・システムというらしいが、自分の贅肉ですら重たいというのに、防弾プレートを入れた防弾チョッキは、その重量だけで一〇キロを超える。それに加えてサイド・プレートまで入っている。

歩兵にいたっては、モール・システムとかで、

背負ったザツクのあちこちにポーチをくつつけて走り回っているのだ。

兵隊なんぞ、とてもやってられないと思った。そして、それ以上に奇異だったのは、自分たちが置かれた状況だった。

上陸した兵隊は、海岸線から真つ直ぐ内陸へと向かう一本の道を走っている。追い越し禁止のセクターラインが延々と続く。幅が広いとは言えない細い道路だ。ところが、そこには、避難する台湾人の自家用車もはまっていた。渋滞して、ほとんど動いていない。

その台湾人の車の横を、武装した人民解放軍の

兵士らが、無言のまま黙々と走っているのだ。そこに銃撃戦は無かった。

事実として、敵味方の銃撃音は全く聞こえない。時折、台湾人の自家用車が、解放軍の兵隊から遠ざかろうと、細い道に入ったりもするが、どこもかしこも渋滞していて出口はなさそうだった。

上陸直後は、直ちに民間の車両を徴用する手筈になっていたが、何しろこう道路がはまっていては、そうすることに意味は無い。警察のパトカーすら、その渋滞に喘いでいるのだ。

台湾全土が停電しているせいで、信号も消えている。それがまた渋滞に拍車を掛けている様子だった。

結局、延々と走る羽目になった。というより走らされた。一瞬とて休憩の暇は無かった。そうするよう命じたのは自分だっただけに、厭になる。兵隊は、あの荷物の上に銃まで担いでいる。その

総重量は軽く四〇キロを超えていた。

それでも彼らは、自分より圧倒的に速いのだ。

道路の右側は畑。左側は民家。その畑作地帯が終わると商店街が現れるが、そんなに大きな町ではない。高い建物もなく、いかにも地方という感じだ。やがて屋根付きのバス停が現れ、「四湖郷公所」と書かれた白い門と、奥に三階建ての建物が見えてくる。

すでに先遣隊が入り、安全を確保していた。玄関ホールに辿り着くなり、馬將軍は、その防弾ベストをまず脱いで床に放り出した。

「話にならんぞ！ 作戦参謀……」

とぼやくと、先着していた作戦参謀のジュウワシシキ莊心楽大佐にほやいた。

「困りますなあ、將軍。そうでなくとも、將軍だけ銃もザックも背負わずに走っているんです。どこかで狙撃手が覗いていたら、自分が指揮官だと

宣伝しているようなものです」

「階級に伴う特権だ。技術将校！ ちょっとこい——」

と作戦参謀の隣でタブレット端末を操作している彭智淵ボシユアン大佐を呼んだ。そして耳元で、「例のネットワークは機能しているか？」と質した。

「はい、問題ありません。最前線はここから五キロ東まで前進しており、すでに二〇平方キロ前後のエリアをカバーしています」

「それは素晴らしい！ 引き続き頼むよ。で、陽明山の状況はわかるのか？」

「私の部下は良い仕事をしましたが、残念ながら今は断線ぎみで、ここで状況を把握することは困難です。恐らく山中へと入ったものと思われま——す」

「そうか。ではわれわれが仕事するしかないわけだな。作戦参謀、私はここまで何分掛かったん

だ？」

「海岸線からおおよそ八キロを六〇分で走っています。ご年齢にしては悪くないことは事実であります……」

「もう百メートルだってご免だぞ」

先遣隊の兵士が、窓口業務のカウンターの上に積まれていたミネラル・ウォーターのミニ・ボトルを將軍に差し出した。

馬將軍は、それを一気飲みしてから、そのカウンターの前に置かれたパイプ椅子に座る壮年男性に視線をくれた。

「さて、貴方が四湖郷の郎英ランインジュー九郷長ですな？ 台湾師範大出。息子さんと娘さんがいらつしやる。確か去年、お爺ちゃんになったばかりでしたな」

馬はそう言うてから自己紹介した。その戦闘服に階級章はなかった。

郎郷長は、眉毛ひとつ動かさずにらみ返したが、

疲れた表情だった。確か、台湾が停電してからも三日目になるはずだ。電気だけでなく、テレビ・ラジオ、インターネットも携帯も使えず、都市機能の全てが麻痺しているのだ。恐らく行政当局はきりきり舞いしていたことだろう。寝る暇も無かったはずだ。

馬將軍は、その向かいに椅子を出させて座ると、「さぞ大変な三日間だったことでしょうな。同情します……」と告げた。

「別に話すことは無い。それとも、私の軍隊時代の認識番号でも教えようか？」

「貴方は捕虜ではない。捕虜を取っている余裕も無い。まず知りたいのは、外の渋滞は何ですか？」

それに、台湾軍はなぜ反撃してこないのですか？」

「そうだな……。私がこうして世間話に応じることで、少しは時間稼ぎにもなるか……」

「ええ。確実にね」

「つまり、こういうことだ。いざ大陸との戦争になれば、上陸に適した海岸線は僅かしかない。こもその一つだ。地域住民としては、いざという時の心構えは出来ていたつもりだった。特にウクライナ戦争以降は。ところが、突然、停電したせいで、なかなか広報が上手く行かない。とりわけ前々日、解放軍が桃園タオユェンに上陸してからは、住民に一刻も早い避難を呼びかけたわけだが、何しろこの狭い島だ。どこへ逃げるのかという話にもなり、住民はなかなか動こうとしなかった。そこへ、どこまで信じて良いのか、その上陸した部隊二万を、台湾軍が全滅させたという情報もたらされて、避難していた住民は引き返してくるし、避難準備をしていた住民たちも、ほっと胸を撫で下ろして、自宅で過ごそうと思いは始めていたところに、貴方たちが上陸してきたわけだ」

「誠に残念だが、その二万の犠牲は事実だ。台湾

軍は良く戦っているよ。たいしたもんだ。で、私  
はここに五万もの兵を連れて上陸してきたわけだ  
が、なぜか台湾軍の攻撃は一切無い。これはどう  
いうことなのだろうな……」

「さあ。軍の考えは知らない。ただ、そういうこ  
とで、住民はさつきからパニックに陥り、慌てて  
マイカーでの避難を開始した。ほんの二時間前の  
話だ。当然、細い道路は渋滞する。何しろここは  
地方でね。そんなに太い道路も無い。それで、私  
としては、軍に、攻撃を控えてくれるよう要請し  
たのだ。どんな反撃になるにせよ、住民を巻き添  
えにしないわけにはいかない。住民脱出が出来な  
かったのは自分の責任だが、とにかく攻撃は控え  
てほしいと頼んだ。もつとも、軍がどう判断した  
かは知らない。返事は貰えなかったのね」

「全く、賢明なご判断です。軍も偉い。これが解  
放軍なら、住民は強制避難させるし、もちろん住

宅街だろうが、お構いなく砲撃しますよ。しかし、  
お陰でわれわれも助かった」

「五万か……。凄いな」

「まだ上陸作戦は続いています。しかし、ここに  
長居するつもりはない。兵士個人が持参している  
食料はほんの三日分だ」

「直線距離で台北まで二〇〇キロもある。いくら  
何でも、三日で攻略は無理だろう」

「はい。しかし解放軍は略奪はしない主義です。  
ロシア軍のようなことはしないよう厳命されてい  
る。面を支配できれば、補給は確保できるつもり  
ではいるが、いずせによ、港湾施設を借りる程度  
で済むでしょう。台湾軍はたぶん、濁水溪ジュオシュイシ辺り  
に阻止線を張っているはずだ。そこが最初の攻防  
になるでしょう」

「台北までは、この後、何本も川を渡る羽目にな  
るんだぞ。もつと北に上陸すべきだったな」

「自分もそうしたかったのですがね。南へ下がれば下がるほど安全になる。さすがに二万の犠牲は大きいですよ。そう冒険は出来ない」

「私は、住民の安全以外関心はない。この地域から出ていってくれるのであれば、濁水溪までパトカーで先導してもいいくらいだ」

「それには及びません。住民には、南へ逃げるよう誘導して下さい。われわれもそうしている。ひよつとしたら、しばらく軍政を敷いて移動手段を徴発する程度はあるかも知れないが、ご協力を頂けると幸いです」

郎郷長は、少し安堵した表情を示した。話が出来る指揮官で良かったという顔だった。

「貴方たちが、軍紀を守ってくれるのであれば、可能な協力はしよう。だが、誤解してほしくないが、われわれは軍の行動には一切口を出せない」  
「わかってる。お互い、最悪の事態が回避され

ることを祈りましょう。正直、ここでぐずぐずしている余裕はない。日が暮れる前に、濁水溪を渡りたいくらいだね。部隊の半数が渡ればと思っ  
ている。たとえ泳いででも」

郎郷長は、軍がそこで阻止線を張って待ち構えていることを知っていたが、わざわざ教えてやるほどのことも無かろうと思っただけに口にはしなかった。もし橋が爆破されれば、復旧には何年も掛かることになる。ひよつとしたら、台北との往復は、山脈の東周りルートを強いられることになるかも知れない。

しかし、優先することは、この街の安全と住民の命だ。ウクライナのように、瓦礫の山にするこ  
とだけはご免だった。

人民解放軍が東沙島<sup>トシヤゲオ</sup>へ奇襲上陸してから一六日  
日が経過していた。戦線は日本へも拡大し、尖閣・

魚釣島を巡って日中が激しい戦闘を繰り広げ、やがてその戦いは、海へも空へも拡大した。

中国は、台湾本島への上陸作戦と同時に、日本と台湾双方でハイブリッド戦を展開していた。

発電所やインターネット網へのサイバー攻撃、あるいは工作員を潜入させての爆破等で、インフラを破壊し、日台両国をブラックアウトに追い込んだ。そして日本へは、東京を狙っての弾道弾攻撃が続いている。

日本ではようやく昨日、首都圏での電力が復旧したが、携帯やインターネットはまだダウンしたままだった。そしてここ台湾では、まだ復旧したインフラはない。

首都台北近郊で両軍は睨み合っていたが、解放軍の第2梯団が、遂に上陸してきた。台湾軍は、これを阻止すること叶わず、部隊はほぼ無傷で上陸していた。

## 第一章 濁水溪

台湾陸軍第10軍団司令部指揮所が設けられたのは、平野部の耕作地帯のど真ん中だった。小さな里山に隣接して、三〇戸ほどの昔ながらの集落があるが、見渡す限り三六〇度、ただの畑だった。

この辺りには、似たような地形が山ほどあった。里山を背景にして小さな集落が発達し、その周囲に肥沃な耕作地が広がるのだ。

敵のドローンを誤魔化すために、車両での接近は禁じられている。隣接する民家を借りて、通信部隊や本部管理中隊等が隠れていたが、指揮所そのものは、里山の鬱蒼とした林の中に、さらに偽装ネットを張って存在していた。

自家発電装置は、民家の中で回し、ケーブルで電源を引っ張ってきている。藪蚊避けの蚊取り線香があちこちで焚かれていて、独特の臭いが立ちこめていた。

第10軍団司令官の余明敏ユイミンミン陸軍中將は、情報部からの最新の報告を聞いていた。

腰の高さに置かれたベニヤ板の作戦テーブル上で駒が動かされ、解放軍の前線せんが更に北へと移動していた。

「敵は、崙背郷ルンペイを迂回しつつ、新虎尾溪シンフーウェイを渡ったわけか……。まああの川は、徒歩でも渡れるからなあ」

「しかし、橋を落とすくらい、してもよかったはずです」

と参謀長の李友宜少将リーヨウイーがぼやいた。

「敵だって、架設橋くらい持つてきてきているだろう。たいして時間稼ぎになつたかどうか……」

「いろいろ納得できない話ではありません。それで破壊される地域社会、戦死する兵士の遺族が総統府の判断を聞いたらどう思うか……」

「桃園での砲兵を使つての一網打尽戦法は一回きりだろう。二度も三度も使える手ではないし、桃園は台北に近すぎる。住宅地を瓦礫の山にしてもそうする意義があつたが……。それに今回は、敵も上陸してすぐ散開しているしな。いくら畑だらけとは言つても、殲滅効果は得られなかつたはずだ。それより、上陸した敵を河川敷に滞留させて叩いた方がましだろう」

参謀スタッフが一人現れて敬礼した。

「情報参謀次長彭威中佐、白景華一等兵を同行しました！」

「彭中佐、ご苦労。だが、いちいち名乗る必要は無いぞ。出世する軍人には一つ共通する特技がある。一度会つただけの兵士の名前と階級を覚えられることだ。ええと……。しかし何の用件だったかな？」

中佐の背後に、若い兵士が一人従つていた。

「はい。嘉義市出身の自分に、周幸儀伍長チョウウジンを知つている兵を探せとのことでしたので、軍団内にある、嘉義郷土会をつてを頼りました」

「ああそうだったな。楽にして良いぞ、一等兵。誰か一等兵に炭酸でも与えろ。君は周伍長を知っているのかね？ 白一等兵。というか、そもそも君は日本のラジオ放送を聞いたのか？」

「ラジオ……。でありますか？ 国防部長が演説したラジオ放送でしたら、誰かが音声を記録し、

スマホで回して聞きました。周幸儀は、中学時代の同級生であります」

「間違い無いか？」

「はい……。というのは、昨年、同窓会がありまして、その時、自己紹介で何の商売をやっているのか皆報告し合ったのですが、軍隊にいると報告したのは、自分と周だけです。それで、二人きりになった時、彼が、パラシュート部隊にいると教えてくれたので、驚いたことを記憶しています」

「どんな男だった？ 皆が知りたがっている」

その場にいた全員が作業を止めて注目した。

「あの……。取り立てて親しかったわけでもないのですが、何と言いますか、普通というか、平凡な奴でした。目立たず、特に何かの冗談を言ったり、クラスの気を引くわけでもない。体育が得意だったわけでも。ただ、マラソンは速かったですね

……。パラシュート部隊にいると聞いて驚いたのは、彼はそういう、何というか、何かを究めるというタイプでは無かったからであります」

「うん。まあ、軍隊という所は、そういう所でもある。若者に目標を授けて人間として成長させる。軍隊に入った理由とか聞いたかね？」

「実家は確か、小さな商店を営んでいたはずですが、一回、親元を離れたかったとか、そんな話だったように記憶しています」

「君たち二人の他に、軍隊に入った奴はいたか？」

「いえ。自分らだけです。軍隊に入った奴は、黙っていてもなんとなくわかります。髪型や雰囲気です」

「そうか……。君は戦車兵なのか？」

戦闘服の胸に戦車兵のロービジ・ワッペンが縫い付けてあった。

「はい。第586機甲旅団（ジョンセン鍾山部隊）であります！」

「そうか……。周伍長の英雄的行為により、われわれは救われた。だがな、白一等兵、君は生き残るんだぞ。命令だ。この戦争が終われば、小学校の名前が、周幸儀顕彰小学校と変わり、通りの名前がひとつ、周幸儀通りになることだろう。われわれは末代まで、その英雄的行為を語り継ぐことになる。君は、英雄の同級生で唯一軍籍にあった者として、語り部として彼の人となり語り継ぐことになる。このあと、半世紀以上も。だから生き延びろ。自分も英雄的戦いをしようなんて余計なことは考えるな。下がってよろしい。彼に何か部隊への土産を持たせてやれ！ 食い物でも炭酸でも」

一等兵が下がると、余將軍は改めてその場にいらる参謀スタッフらを一瞥した。

「諸君！ 私は英雄的行為を望まない。それを部下に望むのは指揮官の無能を意味する。われわれは普通に戦い、できれば安全に戦い、ワンサイド・ゲームで敵を撃退すべきだ。それが戦争の理想だ。だが、もちろん現実には、そんなのはただの幻想に過ぎない。いざその瞬間が訪れたなら、われわれは躊躇ためらわずに、そうすることを兵士に求めるしかないぞ……。覚悟しておけ。」

だがしかし、われわれはそれなりに罨も仕掛けだし、罨も用意した。全員が生き延び、国を救った英雄として故郷に還ろう！ 紅樹林ホンシュリンで戦い散った兵士たちのために、しばし黙禱しよう——」

全員がその場で瞑目すると、木々を渡るそよ風の音だけが響いた。

「さて、情報参謀次長、外の状況はどうかね？」と彭中佐に聞いた。

「はい。避難民の渋滞が続いております。自分ら

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。